



妙たえ の光ひかり

通刊46号 復刊25号
1999年3月15日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

山 桜

春、角田山が桜の花で覆われて全山とまではいかないが、薄いピンク色に染まる。この季節には地元の人達の間でも「いやー、山がいいなア」と交わされるほど見事。というのも以前にはなかった風景で、近年年を追うごとにきれいになっている。

角田山にはもともと松と杉の木が多く、季節の変化は少なかった。それが松食虫の害で松の木が全滅し、その後に雑木の桜が自然にどんどん増えて、成長が早いから年々花が見事になったというわけ。当然紅葉するから秋もいい色を見せてくれる。寺の周囲の山も同様で、常緑樹では見れない季節感はいい。反面、冬枯れする雑木では海からの季節風を遮ることができない。防風林として先人が苦勞して植えた松の恩恵を改めて感じさせられている。つくづく自然との共存の難しさを考える。

見返れば寒し日暮れの山桜

来山

ガン告知

小川英爾

去年の暮れに遺言を書いた。別に大病に罹ったからなんてことではなく『仏教タイムス』という寺院向け新聞社からの原稿依頼だった。最近葬儀や墓が世間の話題になっているが、僧侶自身は自分の最後をどう考えているのか、遺言の形で書くというもの。この原稿は新聞の正月特集で掲載された。

これを書くに当たって考えたことは、私が死んでも個人の財産はないし、葬式も墓も寺の後継者も檀家任せだから特別言い遺すことはない。そのために個人的にも寺としても生命保険に加入しているから金銭的な心配もいらない。(妙光寺では住職の葬儀費用と次の住職の入寺費用が生命保険で賄えるようにしてあり、檀家に特別な負担がかかりません)。ただ「死に対する不安は実感がわかないが、痛みに対して恐怖が強いからガンの告知はしないで欲しい」と書いた。しかしその後考えて、確実に痛みを取ってもらえるなら告知してもらい、残りの日を大切に生きていと思うようになりつつある。

こんな矢先、檀家のIさん(男性)が満五十才の若さで亡くなった。二年余り前人間ドックで肺ガンが見つかり、家族には悪性で手術もできないから時間の問題と告げられた。本人には治るからと伝えられ、偶然にも直前に加入したガン保険もあり退職して放射線治療に専念、昨年末には脳に転移して手術もした。こう書くといかにも重篤な症状に思われるが、じつは入院は繰り返したものの、亡くなる一週間程前までは自宅で犬の散歩をするほど明るく元気に過ごしていた。家族も周囲の友人達も内心治る見込みが無いと知りつつ、この元氣ならもしかしたらと思うほど

だった。私もその一人だ。しかし様態が急変して入院四日目、末っ子の大学入試当日「父さん試験終わったよ」の声に、弱々しいながら応えた後息を引き取った。

最後まで本人には治る見込みがないという告知はしなかったという。しかし気がつくだろうし、苦しいときにはもしかしたらとは考えただろうと思う。にもかかわらず弱気になったり取り乱したりすることはなかったとのこと。家族が言うように我慢強い性格もあっただろうが、私には家族、ことにいつも明るく前向きで人の気持ちを受けとめようという姿勢の妻Y子さんの支えが大きかったと思える。ガン患者介護の経験が長い看護婦さんの本に、告知された患者にとつて痛みへの不安や死そのものへの恐怖以上に、これまでの一切の関係を断ち切り一人で死んでいく孤独、その絶対的な孤独感が最も辛いことだとあった。だから患者に対して大切なことは、相手の苦しみをかち合いたいという一途な思いで、語ることに全身全霊を傾けて聞き、受けとめることだとも。Iさんの家族に対するこの信頼があったればこそ、こうして過ごすことができただのではないかと思う。

そのIさんから一年前突然「家にあるご本尊のお曼荼羅が古くなって痛んだから、お経を上げて修復に出して欲しい」と頼まれた。私はこんなときに急にと思いつつ、元気そうな姿にホッとしながら読経し修復の手配をした。今回このりっぱになったお曼荼羅を掲げた前で葬儀を営んだわけだが、これもIさんが意識したか否か知る由はないものの、もしかしたらと思わずにはいられない。

「これからは何もしてあげることができないので、これからは私もお経を覚えて上げてやりたい」というY子さんが、さらりと言うところに真実味のある何かが共感をよぶ。この夫婦を思うとき『真に悲しみを経験して仏様の悟りの心に近づくことができる』のお経文の一節が浮かんできた。一方で八十過ぎたIさんの母親が「病人があればほど苦しんで家族が頼んでも医者が全然顔を見せないで看護婦任せだった。見込みのない患者はほっておかれるんだネ。いくら大病院でもあんなところはイヤだ」と。告知をすべきだという世間の風潮が強まってはいるが、訴えを聞いたり痛みを和らげたり、その後の対応が不十分ではまだまだ難しいのも当然と感じた。

信心

生き字引きと頼られて

巻町割前

内藤金一郎さん(78歳)

内藤さんは親しい人から屋号の“金五平の爺ちゃん”と呼ばれ、大きな体に優しい笑みを絶やさない。近ごろ足が少しおぼつかなくなってきたが、歩くに支障はなく、いたって健康。なにより人の話を良く聞き、誠実にユーモアも交えて答えるから、この人のいるところに笑い声が絶えない。

二十七歳で兵隊から戻って以来農業一筋。酒は苦手だが几帳面で人当たりのいい性格だから、信頼されて三十七歳から地区の区長をまかされ、都合二十四年間も勤めた。三十五歳のとき病弱だった父親が亡くなり、その後家族を支えながら区長のほかに農協、共済組合、土地改良区、消防団等の役職を勤めてきた。「好きでなかったのはひ

とつもない。天気の良い日に農作業しないで会議に行くのはつらかった」と思い出す。

兵隊で北支の山西省、中国仏教の聖地五台山の近くに捕虜も含めて五年余り。「弘法大師より長く中国にいたが修行に行ったんじゃねえからなんにもならなかった。五台山はあんな山奥にすいお寺だった」と。

家をまかされてからは、寺参りを一度も欠かしたことがない。正月とお盆には必ずで、じつに四十年以上になる。総本山身延山にも三回参り「三回とも七面山に登ったが、三回目のご来光がよかつたのと、そのとき足を痛めた長野のご住職を助けて下山したのが思い出だ」。

七年前、長年苦勞を共にしてきた奥さんに先立たれた。「それまで仏壇参りはバアにまかして俺もたまにするくらいだったが、あれからは毎朝欠かさん。このごろは近所の義弟や二、三の家からも声を掛けられてお経を読みに行く」。地区や親戚筋の若い人たちからは生き字引のように頼られて、なくてはならない存在だ。

現役の畑仕事の他に庭木いじりが趣味。他の人ではできない木まで挿し木して育てるうえに、成長が特別早いなような、そんな不思議な力を持つ。木にまで優しい気持ちで伝わっているかのような。大きく成長した木はみんな

人に分けてしまふ。この春にも、育てたタイサンボクを寺に植える。



本堂建て替え工事経過報告他

本堂工事報告

ご協力いただいております本堂建て替え工事事業は三月十日現在の集計で、

寄付申込総額

二億一千五百十二万九千円

入金済総額

九千三十三万三千四百四十一円

申込総額の四十二%が入金済という状況です。政府の見解とは裏腹に景気は一向に上向かないというのが実感ですが、そんななかここまでご協力いただいておりますこと、心より感謝申し上げます。計画予算は二億五千万円ですので、三月の役員会議で計画の見つ

め直しを含めて慎重に協議いたします。

予定では今年本設計を進めて年末か来年早々に工事業者選考、十二年五月着工、十三年四月竣工です。今後の方針、進行計画は役員会議の結果として次号で夏前に詳しくご報告します。大変厳しい経済状況ですが引き続きご協力お願いいたします。

ご判様行事のご案内

三百年余り前から続く伝統行事のご判様を四月二十九日（祭日）に行います。昨年からの祭日に日にちを改め、また県内の各寺院にポスターを掲示してご案内しましたので、大勢の参詣があるかと思えます。

この法要に出る稚児を募集していただきます。小学校入学前くらいの年齢の男女計十人、檀家に限りません。衣装は着物を含めて一式ありますので、足袋だけ個人で用意してください。子供が少なくなつて定員に充たない年が続いています。ぜひお申込下さい。

秋の団体参拝旅行計画

今年の団体参拝旅行は総本山身延山と七面山登詣、そして希望の多い千葉誕生寺、清澄寺へ回る三泊四日で計画しました。十月四〜七日、バスと途中新幹線利用で八万円の予定。定員四十五人。詳細は再度ご案内しますが、お申込受付はいまからでもどうぞ。



妙光寺史話

日寿上人著

「臨時得意・年中行事」(四)

献立の概略は

- ・飯・汁・すあえ・坪のつ
- ・平・油あげ
- ・二の汁 松たけ、せり
- ・茶碗 やきふ、くわい、しいた
- ・引物 にまめ、にんじん、ひたし、ぜんまい煮つけ等
- ・中酒とも四五献

是等は前段 本膳部也

右相済み一時ばかり休息。その後豆腐味噌吸物にて後段の酒を出す。

なびだし、にしめ、大柿一ツ。等三品程。

(朱書入レ)「御会式後早々、秋奉賀に出る。御会式前ならば尚更よし、ただし、年によるべし。稲刈り後、米の出来た頃に見はからうべし」

・下旬頃より守護等用意。上物紙二束、同中一束、千田四帖、糊入三十枚ばか

り相調うべし。

右守護札二百封上納也

- ・戸札 三百四五十 千田三ツ切
- ・小札 二通り各二百余 千田六ツ切
- ・日待札 五六十枚 糊入五ツ切
- ・洗米包 三百ばかり
- ・内符 三百八十程

※ (1)御会式についての詳細な記述はないが、文面から察すると、多数の参詣人があったことが推測される。

(2)十四日に村役人や檀中有力者への接待は、当時それなりの理由があったのだらう。

霜月(十一月)

・十一日 御難会(小松原の法難)

此日、月次御講、御経説法

(朱書入レ)「夕方参詣揃い候ハバ祖師堂において御経、方便、歎持、自我偈、

御説法」

・十九日廿日頃より、守護札配りに、所化一人出す。晦日頃よりは好も出る。滞在すること長し。各々十二三

日ずつ、是は処々において月忌時齋を相勤めるからである。此節年頭に配る煎餅はあつらえ置く。全部で千把そのうち七把は方丈分。三百は是好の分也。

・下旬頃、正月の酒を仕込む。白米八斗、糍(コウジ)もまた八斗也。

また此節より来年々回の精霊、微細に練り出し、帳面に記しておく。また加茂紙二十枚ばかり継ぎ、逐一記しておく。廿日頃、すす払いの後、位牌所の外、鴨居に張る。

・極月(十二月)

極月は多分、月次御講もなし。中下旬見合わせ、すす払い。小月は廿六日、大月は廿七日餅搗。白米三斗、栗見合(朱書入レ)「餅搗人。兵左右衛門、徳兵衛、前より頼みおくこと。」 ※(1)

・年頭煎餅 千二百把

・嘉永二酉十二月廿八日餅搗 ※(2)

餅米四斗

御鏡

三宝様大三ッ置
祖師堂高祖同段
七面宮中二ッ置

ほかに、のし餅三枚、かき餅少し有。

搦人二人村より頼む

・当年十二月十六日味噌作る。※(3)

村より女二人頼む。大豆一石、糘

一石、塩三月時分喰う分は四合(大豆

一升について四合)五月時分喰う分は

五合、そのほか七合塩なり。これ以後

は一度に一石も造るはよろしからず。

樽が空き次第、七合塩として度々つく

るべし。左様致し度候。古き味噌より

喰わねば年中新味噌は喰えぬなり。

兼ねて御符入宝贖用意のこと

奉敬礼大日天王如意円満守符

手号
正月吉日

右五枚、遠藤氏・仁嘉村、割前本家、

巻与三兵衛、下山太郎左衛門五軒へ。

頂戴正月十三日日待の節、銘々頂

き帰り候也。

奉敬礼 大愛染明王如意円満守符

立春良辰

右二枚、巻与兵衛、曾根孫七、両家年

札の説頂戴。

奉敬礼歳徳大善神鎮座

右四枚御符は、一枚は寺、一枚は割前
本家、一枚は同甚三郎、一枚は啓介。

寺にては廿八日頃、歳徳棚莊嚴の

時御符入替え。

割前二軒は歳暮参詣の節遣わす。

奉敬礼三宝大善神鎮座

是は寺の分ばかり。

以上の宝贖書法経文等、随意たるべ

きものか、今、日寿認め来ることを記

すばかり也。

(朱書入レ)「荒神札を曾根柵屋酒造へ
遣わす

奉勧請 日本 七面大明神 家内安全

最初

・歳徳神御礼、近頃、割前檀中歳暮二

来ル時、九軒残らず遣わす。十二月十

日前に用意のこと」

・廿七八日頃、諸式買物二遣ワス。此

時清酒モ調べキコト。

・大晦日、七ツ時より本堂勧行。

(朱書き入レ)

・大滝歳暮

・志のり昆布一枚

・そうめん一玉

・是品物時に宜敷

・五ヶ遠藤へ歳暮

・志のり昆布一包

・是も時に宜敷

・寺家へ濁酒三升

・本妙院師へ

・すすはき村より二人頼み、祝儀に百

文ずつ遣わす。

・歳暮(後年日義上人追加)

・村庄屋へ 志のり一包、黒砂糖一

斤

・大滝へ 志のり一枚、そうめん二

斤

・村の医師へ 二百文

・遠藤へ 志のり一包

・寺家へ 濁酒三升

・追加 遠藤氏へ寒見舞として味噌
酒一升、そのほか、有合せの物見合わ
せて遣わすべきこと。」

※

(1) 太陰暦では一ヶ月が、小月は二十九
日、大月は三十日である。

(2) 嘉永二年の住職は仁箇出身の日胆上
人であった。後本園寺四十三世となら
れた。

(3) 味噌づくりの塩の量について記述し
てあるのがおもしろい。男性だけのお
寺では、一般の家の女性が考えること
も住職が注意しなければならなかつ
た。

(石田 誠太郎)

会員宅をお訪ねしました

千葉県に住むKさん夫妻を上京の折に住職が訪ねました。前々から「女房が一度も伺った事がないのに足が悪くなってしまう、ご住職にすら会えないのも寂しいから寄ってもらいたい」との電話をいただいていた気になっていました。

Kさんは秋田の鉾山で早くから父親に代わって家族を養ってきました。事故による閉山で各地を歩いた後東京で結婚、町工場勤務で定年を迎えて埼玉に家建てました。10年程前に日当たりのいい今の地に移り、子供のない二人暮らし。八十才を越して奥さんの足の手術で一時は歩けるかと心配

したものの、家の中ならどうか家事がこなせるそうです。それでも買い物はじめKさんが元気でいなければならず、運動を心がけているとのことでした。

おふたりの心配は動けなくなったときのことと、もしものとき葬式と遺骨をどうやって新潟まで運ぶかということでした。兄弟はいるものの、高齢なうえ病気がったりしてあてにできないそうです。

基本的に困ったときは行政の福祉に頼るしかないと。葬儀に関しては妙光寺でお受けするし、そうでない場合でも相談には乗るのですぐに連絡し

てください。葬儀に多額の費用をかける心配はありません。遺骨を運ぶ人がいなければ私なり代理なりが来ますとお話ししました。今のところ安穩廟ではこれが限界です。

高齢者が安心して暮らせる集合住居を作りたい夢はずっとありますし、やりたいという若い人もいます。しかし今すぐには動けないというのも現状です。他にもご相談等ありましたらお役に立てるかどうかわかりませんがご遠慮なくどうぞ。それがお寺です。

八月のフェスティバル安穩は月末の二十八・九日、十回目です。ゲストに樋口恵子さん他が決まりました。来年は本堂工事の都合上規模縮小になりますのでぜひご予約ください。

安穩廟の春は桜が最高です。四月一杯楽しめます。おでかけください。鎌倉での集まりはできませんでした。また計画します。

自立宣言?!



一日の仕事がきちんと終わって、風呂あがりに顔の手入れをして、子供の汚した部屋もさっとかたづけけた。たったこれだけのことで気持ち良く夜を迎えられる。蒲団にくるまりしばらく本を読むひとときはしあわせです。

この冬は、いつも寝ていた部屋から一人で脱出しました。住職は真つ暗な部屋でないと眠れないたちで、私が蒲団に入る時間にはすでに眠りかけているので、本を読むためにあかりをつけて起こすのはためらわれます。一方で私は駅のベンチでも眠れるくらいの神経なので、子供が泣こうが、明るかろうが平気ですが、眠る前にならず五分でも本を読みたい。

だからなるべく住職と寝る時間を

あわせるか、先に寝てしまおうか、あれこれ努力をしていました。最近はその些細な努力がわずらわしくなってきました。

もうしなくて良い我慢はしなくて、もなんとかなる年齢になったと思えます。この別居?をきっかけに、私は今年自立します。と宣言し、自分の全ての時間を夫と子供にささげてきた生活のリストラを考えています。

いつのまにか、そしてあつという間に子供は中学生になってしまいました。住職も四十半ばになり、仕事も忙しくなっていることもあって、油っ気も抜けてあまり私にもうるさいことを言わなくなりました。家族の一人一人が自分の道を歩み始めたことに、ほつ

としています。

冬のあいだこれからの自分のことを考えていたら、楽しくてしかたがなかった。だいそれたことは出来ないけれど、「なにかしよう」と気分を前向きに変えただけでこんなに明るい気分になれるなんて、と思います。

お寺での生活が中心となることはもちろん、一日三十品目を食べることに挑戦するとか、体重を減らして健康になるとか、小さなことです。

そして、おこがましいかもしれませんが、皆さんの役にたてるような事が出来たらと思っています。私で役に立つならばお手伝いをさせていただきます。困ったことがあったら電話をください。

真夜中、時折全ての音が止まっているかのような深い静けさのなかに、聞こえるフクロウの鳴き声。この声が聞こえる時は、明日は良い天気になるそうです。

小川 なぎさ

行事案内

三月二十一日(日)

春のお彼岸中日法要

午前十時半

安穩廟法要

十一時

彼岸会中日法要

十二時

おとぎ

午後一時

説教

ことしは日曜日とかさなりました。それでも都合でお墓参りだけという方も、本堂の仏様へのお参りをお忘れなく。

毎度のお願いですが、お墓参りの後、お供えした燃えない物(缶、ビン、ガラス、ビニール)は放置せず必ずお持ち帰りください。風で飛んで危険なうえ後始末に困ります。ご協力お願いします。

お斎(とき)にはどなたでも着いていただけます。広間に受付帳場がありますので、お申込ください。

お彼岸から岩屋七面様ののぼり旗

と、本堂前お題目ののぼり旗を立てます。本堂前ののぼりは巻町和田喜作さん、岩屋ののぼりは檀信徒五十人の方々から奉納いただきました。お礼申し上げます。

四月二十九日(みどりの日)

ご判様お開帳大会(だいえ)

午前八時半

受付開始

九時

説教

十時

奉迎行列(岩屋発)

十時半

山門法要、おねり

(稚児、音楽)

十時四十分

音楽大法要

十一時五十分

説教、お開帳

午後一時半

施餓鬼法要

二時半

祖師堂お開帳

三時

終了

事前に志納金袋、施餓鬼法要の塔婆と祈願の申込書を配布します。お申込ください。

今年の当番は山本組、また角田地区の方にはのぼり立てと輿担ぎを、それぞれよろしく願います。

また五ページにありますように、稚児を募集しています。お申し出ください。

あ・と・き が・き



この「妙の光」は新潟市内の小さな印刷会社に最初からお願ひしています。身体障害者の方が多く働いているというところで、私が僧侶の青年会で事務局を任されたとき先輩から引き継いだのが縁でした。以来かれこれ二十年近いつき合いになります。昨年末その社長の息子さんから突然「父が今危篤です。私たち家族は皆『妙の光』のファンで、父の希望でもありましたのでお葬式とその後のお墓まで妙光寺さんのお世話になりたいのですが……」との電話がありました。つらい話ですがありがたいうお申し出としてお引き受けして、以来檀家としてのおつき合いも始まりました。人間どこで人の縁が生まれるかわからない、つくづく実感した次第です。

(小川)